

No.2904

17 世紀清・モンゴル・チベットの国際関係ーザサグ号の授与過程に着目してー

東京大学大学院総合文化研究科

博士課程

前野 利衣

17 世紀中葉の内陸アジア東部には、東方に清、西方にダライラマ 5 世の政権、そして北方にはハルハやオイラト等のモンゴル系勢力があり、それぞれ独立を維持していた。本研究は、この時期に清皇帝がハルハ諸侯に授けた「ザサグ」という称号に着目することで、清・モンゴル・チベット間関係の一側面を明らかにするものである。

清皇帝は、55 年にハルハの有力者 8 人(八扎薩克)を初めてザサグに任命し、続いて 1686 年・1689 年にもザサグの任命を行なった。従来、初回の八扎薩克が特に注目されてきたが、後の 2 回の意義は不明瞭であった。そこで、この 3 回にわたる任命の経緯をそれぞれ検討し、次のような成果を得た。

清側は、1655 年に八扎薩克を代表とする年貢の体制をただちに整備することはできず、八扎薩克体制の成立時期はヨ 661 年にまで下る。続く 86 年の任命に至るまでに、ハルハ諸侯自ら清皇帝にザサグ任命を要請し、同時にダライラマ 5 世からもザサグの承認を受けていた。その後、ハルハ諸侯は 1688 年にジューンガル部ガルダン=ハーンの侵攻を受け、その多くは清に投降していた。それを受けて康熙帝は 89 年からハルハに扎薩克旗を編制し、その翌年には官制の整備にも着手した。このような状況下で任命された 89 年のザサグは、事実上の旗長であったと考えられる。

以上より、17 世紀のハルハ・清関係を、①清がハルハを包摂していく過程として見ることはできず、ハルハ側からも清側に積極的な働きかけがあったこと、②両者間の問題を、ダライラマ 5 世をも含めた三者関係の中で捉える必要があることが明らかになった。